

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03194

研究課題名（和文）偽ニュース：誰が信じ、広めるのか？

研究課題名（英文）Fake News: Who believes it? Who spread it?

研究代表者

眞嶋 良全 (Majima, Yoshimasa)

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50344536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フェイクニュースや非実証的信念と個人の認知・社会的特性の関連性を調査した。まず、日本語版の陰謀論信念（GCBS-J, CMQ-J）と擬人化傾向尺度（IDAQ-J）を開発し、信頼性と妥当性を確認した。陰謀論信念等の非実証的信念は直感的思考スタイルと正の相関を示し、合理的思考とは負の相関を示すことが一貫して観察されたが、特に日本人において合理的思考と非実証的信念の関連性は正の相関が見られることもあった。また、フェイクニュースや陰謀論の共有には、情報の真実性よりも他者との関係性や自己呈示が影響すること、日本人と西洋文化圏の参加者間では異なる傾向があることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、フェイクニュースや非実証的信念の理解に重要な知見を提供し、それらがどのようにして拡散し、人々の信念形成に影響を与えるかを明らかにした。特に、日本語版の信念尺度の開発と検証を通じて、文化的背景が認知と信念に与える影響を示した点は、新たな視点を提供するものである。また、フェイクニュースの共有行動に関しては、他者との関係性や自己呈示が大きな役割を果たすことが明らかとなり、今後の情報伝達研究において重要な示唆を与えるものである。これらの結果を基に、誤情報の拡散を防ぐための対策や教育プログラムの開発が期待される。

研究成果の概要（英文）：This study explored the relationship between fake news, epistemically unwarranted beliefs, and individual cognitive and social characteristics. First, Japanese versions of the conspiracy beliefs scales (GCBS-J and CMQ-J) and the Individual Differences in Anthropomorphism Questionnaire (IDAQ) were developed, and their reliability and validity were confirmed. The results indicated that epistemically unwarranted beliefs are positively correlated with intuitive thinking styles and negatively correlated with reflective thinking, although a positive correlation with rational thinking was observed among Japanese participants. The sharing of fake news and conspiracy theories was found to be influenced by interpersonal relational factors and self-presentation strategies than by the truthfulness of the information. The study also observed different tendencies between Japanese and Western participants regarding the impact of self-presentation strategies.

研究分野：認知心理学，認知科学

キーワード：フェイクニュース 陰謀論 陰謀論信念 直感的思考 共有 文化

1. 研究開始当初の背景

ポスト真実 (Post-truth) とは、客観的事実よりも感情や信条が世論形成に効果的であることを示す、2016年のオクスフォード英語辞典の Word of the Year に選ばれた言葉であり、英国のEU離脱や米国大統領選を機に、フェイクニュース (fake news) と共に広く認知されるようになった。フェイクニュースは、利益獲得を目的とした虚偽情報や誘導的な情報を指し、その拡散には、旧来の権威への不信感や SNS の浸透が関与しているとされる。SNS 上でのフェイクニュースの拡散については、Twitter データに基づく調査やシミュレーションが行われ、フェイクニュースが速く広範囲に拡散する結果や、真実の方が速く伝達される結果が示されているが、結果には必ずしも一貫性はない (Vosoughi et al., 2018; Jang et al., 2018)。また、フェイクニュース受容と個人の認知特性の関連性はほとんど検討されていない。

フェイクニュースは、陰謀論や疑似科学と同様の認知過程が関与していると推測されるが、これら実証的根拠を欠く信念の信奉は省察的思考とは負の相関があり (Pennycook et al., 2012)、直観的認知過程の産物であるパターン錯覚や擬人観とは正の相関がある (Brotherton & French, 2015; van Prooijen & Douglas, 2018) ことが知られている。しかし、日本人を対象にした研究では、合理的思考傾向と信念の間に正の相関が見られる結果もあり、文化差の影響の可能性が指摘されている (Majima, 2015)。

2. 研究の目的

以上の状況を踏まえ、本研究課題では、特に以下の2点に関する実証研究を行った。

1. フェイクニュースおよび関連する非実証的信念の受容と個人の認知特性の関連性
2. フェイクニュースおよび非実証的信念の伝達可能性

3. 研究の方法

研究目的1については、基盤となる測定方法の整備を行うとともに、省察的認知傾向、パターン錯覚、擬人観、対人信頼感、アノミーや、政治的志向性等の個人の認知・社会的特性とフェイクニュースと関連する非実証的信念の関連性を検討することとした (1-B)。なお、この研究に先立ち、基盤となる測定方法として、日本語で利用可能な陰謀論信念と擬人化傾向の個人差を測定する尺度の整備を行うこととした (1-A)。

陰謀論信念を測定するための尺度としては一般的な陰謀論への傾倒傾向を測定する一般的陰謀論者信念尺度 (Generic Conspiracist Belief Scale, GCBS; Brotherton et al., 2013)、および陰謀論的心性質問票 (Conspiracy Mentality Questionnaire, CMQ; Bruder et al., 2013)を、擬人化傾向の個人差尺度としては IDAQ (Individual Differences in Anthropomorphism Questionnaire, Waytz et al., 2010)を採用し、それぞれの日本語版の作成を行った。また、それらの尺度作成を通じて、認知・社会的特性との関連性を検討した。

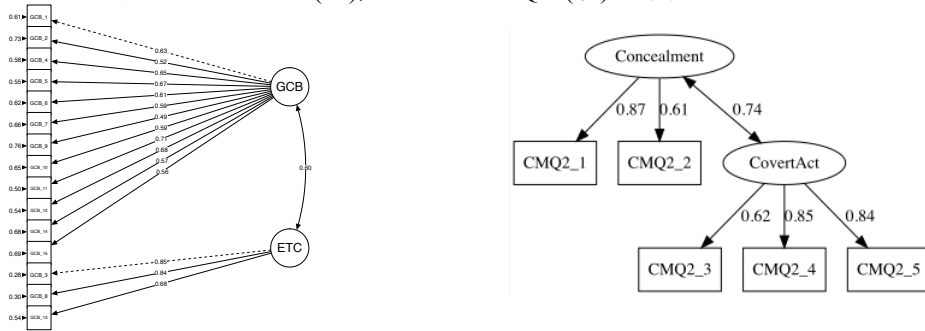
研究目的2については、非実証的信念およびフェイクニュースの内容を含むニュースや SNS の投稿が、他者との間で共有されるか、またその共有に影響する変数は何かの検討を行った。

4. 研究成果

1-A (非実証的信念測定手法の整備)

陰謀論者信念尺度日本語版 (GCBS-J) の開発 (Majima & Nakamura, 2020) では、600名の参加者のデータをランダムに半分ずつに分割し、片方を探索的因子分析 (EFA)、もう片方を確認的因子分析 (CFA) のデータセットとした。EFA では、ガットマン基準 (固有値1以上) は3因子構造、平行分析は6因子、スクリープロットの視覚的検証と最小平均偏相関 (MAP) 分析の結果は2因子構造を提案したため、解釈可能性なども考慮した結果、2因子解を採用した。因子1には12項目が、因子2には3項目が負荷し、全ての項目は0.4以上の負荷量を示した。因子2の負荷量が高い3項目は異星人の隠蔽に関連していたため、この因子を「異星人陰謀信念 (extraterrestrial conspiracist belief; ETC)」と名付けられ、因子1の負荷量が高い12項目は多様なイベントで構成されていたため、この因子は「一般的陰謀信念 (general conspiracist belief; GCB)」と名付けられた。CFA では、先行研究から採用された3つのモデル (Swami et al., 2017) と、初期 EFA で提案された15項目2因子モデル (図1左) を検証し、15項目2因子モデルが最も適合していることが示された (CFI = .909, RMSEA = .075, 90%CI [.064, .084], SRMR = .060)。

図 1 GCBS-J(左), および CMQ-J(右) の因子構造



さらに、より少なく、かつ抽象的な5項目で陰謀論信念を測定できる陰謀論的心性質問票日本語版 (CMQ-J) についても、317名の参加者データによるCFAを実施した(眞嶋, 2022a; 印刷中)。この尺度については、原著において単因子構造が仮定されていたため、同様の単因子モデルでのCFAを行ったが、単因子モデルの適合に問題があり、「秘密活動 (Covert activity)」および「情報隠匿 (Concealment of information)」という2因子構造を持つモデルが適合することが明らかとなった (CFI = .988, RMSEA = .077, 90%CI [.027, .131], SRMR = .031, 図 1 右)。ただし2因子の相関は強く ($r = .74$)、陰謀論の信念構造に関する先行研究の勧告に従い、実用上は合成された単一信念として扱うことができると考えられる。

擬人化傾向を測定する IDAQ の日本語版の開発 (中村他, 2024) については、まず EFA ($n = 500$) を行い、自然、機械、生物の3因子構造が示された。また、15項目は、それぞれの因子に十分な因子負荷量 (全て 0.4 以上) を示した。モデル適合度指標としては、4因子構造が最も高い適合度を示したが、RMSEA の 90%信頼区間が3因子構造と重複していたため、3因子構造が採用された。続く CFA ($n = 200$) では、探索的因子分析の結果に基づいて、IDAQ-J の15項目に対し最尤法による分析を行った。3因子に上位の一般的擬人化傾向因子を置く2次因子モデルの適合度指標は、RMSEA = .05 (90%CI [.04, .07]), TLI = .96, SRMR = .07 であり、適合度は良好であった。また、2次因子である一般的擬人化傾向に対する負荷量も高く、IDAQ-J の因子構造は安定していることが確認された。また、IDAQ-J の一般的擬人化傾向と1次因子得点は、既存の擬人化傾向に関する尺度と中程度以上の正の相関を示し、特に自然物に対する擬人化得点間で強い相関が認められた。以上の結果から、IDAQ-J は日本人参加者における擬人化傾向を測定する信頼性と妥当性のある尺度であることが確認された。

1-B (フェイクニュースおよび非実証的信念と関連する認知・社会的特性)

1-A で作成された尺度を含む非実証的信念と個人の認知・社会的特性との関連性については、以下のように整理される。まず、陰謀論信念は、その他の非実証的信念 (具体的には超常現象への信奉や、疑似科学の信奉) と中程度以上の正の相関 ($r_s = .14 - .47$) を示し、また陰謀論信念を測定する尺度間の相関は高い (眞嶋, 2022a, 印刷中; Majima & Nakamura, 2020)。さらに、GCBS-J や CMQ によって測定される一般的な陰謀論への傾倒傾向は、9/11 テロ攻撃黙認説などの具体的な陰謀論を良く予測 ($r_s > .43$) した。個人の認知・社会的特性との関連について言えば、陰謀論はアノミー、パラノイアや、右翼の権威主義と正の相関を示し (概ね, $r_s > .15$)、国家や公的機関、専門家に対する信頼とは負の相関を示す ($r_s > .12$) が、一般的な対人信頼感とは関連が弱いことが明らかとなった (眞嶋, 2022, 印刷中; Majima & Nakamura, 2020)。また、擬人化傾向を示す IDAQ-J の得点と GCBS-J の得点は正の相関を示し ($r = .36$)、対象に意図のような心的機能を帰属する擬人化傾向が高いほど、出来事の背後に悪意ある陰謀があると考えやすいことが示された (中村・眞嶋, 2023)。さらに、陰謀論の信奉は直感的思考スタイルとは一貫して正の相関を示すものの、合理的・省察的思考との間では負の相関が見られる場合とそうではない場合があり安定しないこと、また、陰謀論信者はしばしば矛盾した陰謀論を同時に信じていることがあるが、その矛盾した信念の保持は合理的思考によっては予測することが難しいことも明らかとなった (Majima, 2023)。

超常信奉や疑似科学信念も、認知能力、合理的および省察的思考、直感的思考などと関連し、特に直感的思考との間の正の相関、および認知的内省性検査によって測定される省察的思考との間の負の相関は、複数の研究を通じて一貫して観察されている (e.g., Pennycook et al., 2012)。加えて、深遠そうに見えるデタラメ (pseudo-profound bullshit; Pennycook et al., 2015) も同様の傾向を示している。Majima et al. (2022) は、この点について日本人および西洋文化圏の参加者を対象とした発展的研究を行い、概ね先行研究と同様の傾向を確認し、これまでの知見をいわゆる WEIRD (教育を受けた工業化された社会に生きる、裕福で民主的な西洋文化圏の居住者) 以外にも拡張することができた。ただし、ひとつ重要な知見として、非実証的信念と認知・社会的特性との関連性は文化の影響を受け、直感的思考は一貫して信念とは正の相関を示すのに対して、

合理的・省察的思考は西洋文化圏では信念と負の関連性を示すが日本人参加者は逆に正の関連性を示すといった特徴を持つことを明らかにしている。

一方、陰謀論信念や擬人化傾向が、具体的な我々の思考・行動をどの程度予測するかという点については、陰謀論信念は新型コロナウイルス感染禍中での Covid-19 ワクチンの接種に対して躊躇ないし忌避的に作用するが、それ以外のワクチン（インフルエンザおよび HPV）接種との間に関連性はないこと（眞嶋, 2022b）が明らかとなった。

2 (フェイクニュース, 陰謀論等の誤情報の伝達)

情報を他者に共有, 伝達するにあたっては, その情報の真実性以上に, 共有・伝達による他者との関係性, あるいは他者からどのように見られたいかが伝達行動を左右すると考えられる。この点について, 本研究代表者ら (Altay et al., 2023) は, 他人から良い人, あるいは優しい人と評価されることを望むなど, 他者との結びつきを重視する交感性 (communion) が高い人は, 他者に対して優越的であろうとする人に比べて, 否定的な信念や情報よりも肯定的な信念や情報 (happy thoughts) を共有しようとする人, 肯定的信念の共有は他者に対して良い印象を与えるために行われ, また実際に肯定的信念を共有しようとする人は交感性が高く, 支配的・競争的 (dominant and competitive) 人物としてではなく優しく良い (nice and kind) 人物であると評価されやすいことを4つの実験から明らかにした。ただし, 併せて, 日本人参加者では, 西洋文化圏の参加者に比べると, 共有される信念の内容 (感情価) による人物印象の違いはそこまで明確ではないことも示されている。

さらに永澤他 (2023) は, SNS における陰謀論的な投稿の共有には, その共有の目的が重要であり, 正確な情報を共有しようとする目的の下ではそうした投稿は共有されにくい, SNS における「いいね!」反応やコメントなど他者からの社会的称賛 (social engagement) を獲得しようとしている状況では, 陰謀論的な投稿が真実ではないと認識しつつも, そのような投稿を共有しがちであることを明らかにした (図 2)。また, この研究で特徴的な知見の一つには, 共有の目的を操作しない統制条件における選択は, 社会的称賛獲得を目的とした条件と等しく, 人はデフォルトの状態ではフェイクニュースや陰謀論などを共有しやすい性質をもつ可能性があることも示されている。

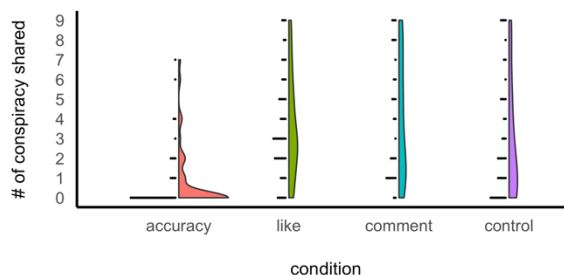
以上の結果より, 誤情報の伝達や共有には, 伝達者がその内容を真と考えているかどうか以上に, 他者に対して与える自己の印象を制御するといったような社会的場面での自己呈示戦略が影響する可能性が示唆されたと言える。

以上の通り, 本研究は, フェイクニュースや非実証的信念と個人の認知・社会的特性の関連性を調査した。まず, 日本語版の陰謀論信念尺度 (GCBS-J, CMQ-J) と擬人化傾向尺度 (IDAQ-J) を開発し, その信頼性と妥当性を確認した。加えて, 陰謀論信念や超常信奉, 疑似科学信念は直感的思考スタイルと正の相関を示し, 合理的思考とは負の相関を示すことが一貫して観察されたが, 特に日本人において合理的思考と非実証的信念の関連性は正の相関が見られることもあった。また, フェイクニュースや陰謀論の共有には, 情報の真実性よりも他者との関係性や自己呈示戦略が影響すること, 日本人と西洋文化圏の参加者間では異なる傾向があることが明らかとなった。本研究は, フェイクニュースや非実証的信念の理解に重要な知見を提供し, それらがどのようにして拡散し, 人々の信念形成に影響を与えるかを明らかにした。特に, 日本語版の信念尺度の開発と検証を通じて, 文化的背景が認知と信念に与える影響を示した点は, 新たな視点を提供するものである。また, フェイクニュースの共有行動に関しては, 他者との関係性や自己呈示が大きな役割を果たすことが明らかとなり, 今後の情報伝達研究において重要な示唆を与えるものである。これらの結果を基に, 誤情報の拡散を防ぐための対策や教育プログラムの開発が期待される。

引用文献

- Altay, S., Majima, Y., & Mercier, H. (2023). Happy thoughts: The role of communion in accepting and sharing (mis)beliefs. *British Journal of Social Psychology*, 62, 1672–1692. <https://doi.org/10.1111/bjso.12650>
- Brotherton, R., & French, C. C. (2015). Intention Seekers: Conspiracist Ideation and Biased Attributions of Intentionality. *PLoS ONE*, 5. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0124125>

図 2 共有目的による陰謀論的投稿の共有数の違い



- Brotherton, R., French, C. C., & Pickering, A. D. (2013). Measuring belief in conspiracy theories: The Generic Conspiracist Beliefs scale (GCB). *Frontiers in Psychology, 4*. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2013.00279>
- Bruder, M., Haffke, P., Neave, N., Nouripanah, N., & Imhoff, R. (2013). Measuring individual differences in generic beliefs in conspiracy theories across cultures: Conspiracy Mentality Questionnaire. *Frontiers in Psychology, 4*. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2013.00225>
- Jang, S. M., Geng, T., Queenie Li, J.-Y., Xia, R., Huang, C.-T., Kim, H., & Tang, J. (2018). A computational approach for examining the roots and spreading patterns of fake news: Evolution tree analysis. *Computers in Human Behavior, 84*, 103–113. <https://doi.org/10.1016/j.chb.2018.02.032>
- Majima, Y. (2015). Belief in pseudoscience, cognitive style and science literacy. *Applied Cognitive Psychology, 29*(4), 552–559. <https://doi.org/10.1002/acp.3136>
- 眞嶋良全 (2022a). 日本語版陰謀論的心性質問票の構造および信頼性, 妥当性. 日本心理学会第 86 回大会論文集, 119. https://doi.org/10.4992/pacjpa.86.0_2PM-007-PC
- 眞嶋良全 (2022b). 新型コロナウイルス感染禍の下でのワクチン接種意図. 日本社会心理学会第 63 回大会論文集, 116.
- Majima, Y. (2023, March 9 – 11). *Endorsement of conflicting conspiracy theories is not associated with analytical thinking* [Conference presentation]. 2023 International Convention of Psychological Science (ICPS), Brussels, Belgium.
- 眞嶋良全 (印刷中). 日本語版陰謀論的心性質問票の開発と妥当性の検討. 社会心理学研究.
- Majima, Y., & Nakamura, H. (2020). Development of the Japanese version of the Generic Conspiracist Beliefs Scale (GCBS-J). *Japanese Psychological Research, 62*(4), 254–267. <https://doi.org/10.1111/jpr.12267>
- Majima, Y., Walker, A. C., Turpin, M. H., & Fugelsang, J. A. (2022). Culture as a moderator of epistemically suspect beliefs. *Frontiers in Psychology, 13*, 745580. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2022.745580>
- 永澤昂希・淡路凜音・高野華凜・眞嶋良全. (2023). 社会的称賛が SNS における投稿の共有に及ぼす影響の検討. 北海道心理学会第 70 回大会 (札幌).
- 中村紘子・眞嶋良全. (2023). 陰謀論信念にパターン認知, エージェンシー知覚, 思考スタイルが及ぼす影響. 日本心理学会第 87 回大会 (神戸).
- 中村紘子・松尾朗子・眞嶋良全. (2024). 擬人化傾向尺度日本語版の作成. 心理学研究, [Advance Online Publication]. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.95.22217>
- Pennycook, G., Cheyne, J. A., Barr, N., Koehler, D. J., & Fugelsang, J. A. (2015). On the reception and detection of pseudo-profound bullshit. *Judgment and Decision Making, 10*(6), 549–563.
- Pennycook, G., Cheyne, J. A., Seli, P., Koehler, D. J., & Fugelsang, J. A. (2012). Analytic cognitive style predicts religious and paranormal belief. *Cognition, 123*(3), 335–346. <https://doi.org/10.1016/j.cognition.2012.03.003>
- Swami, V., Barron, D., Weis, L., Voracek, M., Stieger, S., & Furnham, A. (2017). An examination of the factorial and convergent validity of four measures of conspiracist ideation, with recommendations for researchers. *PLoS ONE, 12*(2), e0172617. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0172617>
- van Prooijen, J.-W., & Douglas, K. M. (2018). Belief in conspiracy theories: Basic principles of an emerging research domain. *European Journal of Social Psychology, 48*(7), 897–908. <https://doi.org/10.1002/ejsp.2530>
- Vosoughi, S., Roy, D., & Aral, S. (2018). The spread of true and false news online. *Science, 359*(6380), 1146–1151. <https://doi.org/10.1126/science.aap9559>
- Waytz, A., Cacioppo, J., & Epley, N. (2010). Who sees human?: The stability and importance of individual differences in anthropomorphism. *Perspectives on Psychological Science, 5*(3), 219–232. <https://doi.org/10.1177/1745691610369336>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Majima Yoshimasa, Walker Alexander C., Turpin Martin Harry, Fugelsang Jonathan A.	4. 巻 13
2. 論文標題 Culture as a Moderator of Epistemically Suspect Beliefs	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2022.745580	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Majima Yoshimasa, Nakamura Hiroko	4. 巻 62
2. 論文標題 Development of the Japanese Version of the Generic Conspiracist Beliefs Scale (GCBS J)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 254 ~ 267
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jpr.12267	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村紘子・松尾朗子・眞嶋良全	4. 巻 -
2. 論文標題 擬人化傾向尺度日本語版の作成	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 心理学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.95.22217	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Altay Sacha, Majima Yoshimasa, Mercier Hugo	4. 巻 62
2. 論文標題 Happy thoughts: The role of communion in accepting and sharing (mis)beliefs	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 British Journal of Social Psychology	6. 最初と最後の頁 1672 ~ 1692
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/bjso.12650	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Majima, Y.
2. 発表標題 Endorsement of conflicting conspiracy theories is not associated with analytical thinking.
3. 学会等名 International Convention of Psychological Science 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 眞嶋良全
2. 発表標題 分析的思考は矛盾する陰謀論の同時保持を抑制するか
3. 学会等名 日本認知心理学会第20回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 眞嶋良全
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染禍の下でのワクチン接種意図
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 眞嶋良全
2. 発表標題 日本語版陰謀論的心性質問票の構造および信頼性, 妥当性
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 眞嶋 良全・藤田 翔大・宮澤 里羽・佐々木 愛実・山 元気・横山 僚
2. 発表標題 表面的に矛盾した陰謀論信奉は核となる信念から生じているのか
3. 学会等名 日本認知心理学会第19回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Majima, Yoshimasa
2. 発表標題 Is the structure of the belief in conspiracy theory equivalent across cultures?
3. 学会等名 The 42nd Annual Conference of Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 眞嶋良全・中村紘子
2. 発表標題 直観的バイアス反応に対する 認知的内省性検査 (CRT) の予測力の普遍性について
3. 学会等名 日本認知心理学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 眞嶋良全
2. 発表標題 日本語版一般的陰謀論者信念尺度の尺度構造の検討
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永澤昂希・淡路凜音・高野華凜・眞嶋良全
2. 発表標題 社会的称賛が SNS における投稿の共有に及ぼす影響の検討
3. 学会等名 北海道心理学会第70回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村 紘子・眞嶋良全
2. 発表標題 陰謀論信念にパターン認知，エージェンシー知覚，思考スタイルが及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	中村 紘子 (Nakamura Hiroko) (30521976)	東京電機大学・理工学部・研究員 (32657)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
カナダ	University of Waterloo			
フランス	CNRS			